
オタクな日常！？

コル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタクな日常！？

【Nコード】

N2380H

【作者名】

コル

【あらすじ】

オタクな主人公が同じオタクの人たちとの日常で、時々シリアスがあるかもしれません。たいして面白くないですかお願いします。

第一話 おもな登場人物

朝俺、鹿島^{かじま} 誠^{かい}高校二年生けんライトノベル小説家をしている普通のオタクの少年だ、その俺は隣の家から聞こえる壮大なアニソンで目が覚める、目を覚ました俺は顔をあらいい目が完璧に覚醒すると家から出て階段を下り食堂へ向かう、まあ食堂といっても数人が一緒にご飯を食べるだけという小さな食堂だ。

「おはようございます〜」

俺はそう言って食堂の中をしてみる、そこに三人ほど人がいた

「おはようさん、今日は土曜日で学校休みだつてのに早いね〜」

今喋った女の人は坂井^{さかい} 直美^{なおみ}さん、髪を肩まで伸ばしていて目はパッチリ開いていてまあ可愛い系でお酒大好きでいつもテンションが高い声優学校に通っている人だ。

「ははは、あんなに大音量で音出されてら誰だつて起きるよ」

今喋った男の人は幸崎^{こうさき} 陽^{よう}さん、有名とはいえないが結構いい所に勤めてる人で好青年という言葉をそのまんまあらわしているという風な社会人だ、だが見た目に騙されてはいけないなんせこの人はロリコンです。

「でも深夜アニメ見た時なんて起きるの辛いのにあんな大音量で音出されたらいやでも目が覚めるから学校とか遅刻しないですむからちようどいいじゃん」

今喋った男は間里^{かんざと} 波木^{なみき}俺と同じ高校に通っている同級生で髪を茶髪に染めていて明らかに現代っ子って感じだが中身はオタクという言葉をそっくり表した奴で深夜アニメはすべて欠かさず見ていて部屋には美少女フィギアが結構な数があり、漫画やエロゲーが結構置いてある、見た目以外正真証明のオタクだ。

そんな感じで話していると、一人の女性が出てきた。

「あ、起きたんですねはい朝食で来てますよ」

この女の人は南洋^{なんよう} 楓^{かえで}さんこのアパートの大家さんけん大学生で俺が書いているライトノベルの絵を書いてくれている人で、床までつきそうなくらいに伸びている髪を最後の方を少し結んでてかわいいというより凛々しいという感じの人で胸が犯罪的にでかい人です。

「いつもありがとうございます」

俺は楓さんにお礼を言ってから手を合わせてから「いただきます」と言って食べようとすると上の方でドタドタと騒がしく音が鳴った。

「どうも皆様おはようございます~~~~~」神崎^{かんざき} 奈美^{なみ}ただいま起床しました!!」

朝からやけにテンションが高いこの女性は神崎^{かんざき} 奈美^{なみ}俺と同じ高校の後輩で茶髪の髪をツインテールにしていたれ目でいかにもとろそうな感じだが実際は興味のあることは努力を惜しまない人だ、そして俺の家のお隣さんでBLが大好きな人だ。

あと少しこのアパートの事を話そう、このアパートは月払うのは三万五千円と結構安く風呂やトイレも共同だがついている、だが一応ここに住むのは条件がある。

一つ目は朝昼晩はできる限りみんなでご飯を食べること。

二つ目毎朝挨拶をかわさない事。

ここまでは住民ボシューの覧にはここまでしか載ってないが三つ目がある。

三つ目はオタクである事。

それがこのアパートいや少し大きい一軒家といった方がいいかもしれない、そんな一軒家で愉快的な住民で過ごす愉快的な日常の話です。

第一話 おもな登場人物（後書き）

へたくそですかよろしくお願いします

第二話 奈美参上

その後みんなでご飯を食べ終わったら陽さんは仕事場へ、直美さんは声優学校に行き、波木はまた眠り楓さんは食器を洗っていて俺は自分の部屋で適当にゲームでもやるうかと部屋に戻った。

「大先生ー奈美に小説を書いてくださいー」

ドカーンとかいう効果音がつきそうな勢いで奈美がいきなりドアをぶち破って入って来た。

「いやだ」

俺が断ると奈美は俺の腰にしがみついて駄々をこね始める。

「なんでですかー前書いてくたじゃないですかいいじゃないですかー」

「知るか前はかりを返したただけだろう、ってか男の俺にBLの小説を書かせようとするな!!」

そう俺は前、奈美に何を間違えたのかお金を借りてしまいその借りを返すということでBLの小説を書けと脅され結果三日監禁されBLの事を詳しく勉強させられて、その後小説を書かされその小説が奈美が気に入ってしまいここ一週間朝昼晩いつもかけかけ言ってくるんですよ・・・。

「ひどいです・・・いいじゃないですか、私は幸崎クンと光クンが今後どうなっていくのか気になるんですー」

ひとつ言っておくけど幸崎^{しあき}クンと光^{ひかる}クンはその書いたBL小説に出てくるキャラだ。

「一応あれはあれで完結出来てるだろう、いいじゃんか」

「いやダメです一応あれはあれでいいんですけど新キャラを書いてドロドロの三角関係にしてください、お願いします〜〜〜」

「いやだ〜〜何で男の俺がBLなんか書かなきゃいけないんだ!」

「いいじゃないですか〜〜先輩才能ありますから!!私が保証します」

「お前に保障されても嬉しかねえよ」と言いながら俺は携帯を操作して楓さんにメールをする、その内容は変態がいるので助けてくださいというもののだが。

「誠さん大丈夫ですか!？」

「いいえ大丈夫じゃありません、腰についてる変態が離れないんですよ」

メールを出してからまだ一分も経ってないのに来た楓さんをすごいなーと思いながら俺は腰にひっついてる奈美を指でさした。

「ひどいです〜〜泣いちゃいますよ、いいんですか?こんな可愛い後輩が泣いちゃうんですよ!」

「何してるんですか!誠さんの腰にしがみついてうらやま・・・」

いえ、とりあえず離れてください」

なんか今楓さんが変なこと言うとしたと思うけどまあ聞かなかった事にしよう。

そう思っているうちに楓さんが奈美を捕まえてくれていた。

「では、隊長よろしくお願いします」

敬礼のポーズをしながら言うと言った楓さんも合わせて「でわ、行つてまいります」と、楓さんも敬礼のポーズをして出て行った。

その時に奈美が「私を倒した程度でいいきにならないことですよ先輩、次には第二の奈美、第三の奈美が現れますからね」と捨て台詞を言いながら楓さんに連行された奈美に、お前は魔王かと突っ込みたい衝動に襲われたが我慢してゲームをやる気分じゃなくなつたから俺は眠りについた。

午後十二時俺は楓さんに昼ご飯を食べる時間ですよと楓さんという名のエンジェルに起こされ、俺はそのまま食堂に向かった。

「あゝ先輩、こんにちわです」

「お、誠先に食べてるぞ」

そこには奈美と波木が向かい合ってごはんを食べていて奈美の隣に俺の分のごはんが置いてあった。

「さあ先輩、先輩のごはんを置いておきました」

と、やけにニコニコした顔で奈美は言ってきた、ごはんをおいてくれたのはいいんだがおいてくれた場所がきになる、奈美じゃなかったら恋する女の子が好きなのと近くにいたくてご飯を近くにおいたという想像ができるのだが、こいつは絶対俺にBL小説をかけかけ言つつもりだ俺にはわかる。

まあ、そんなわけで俺は奈美がなんか言っているが俺は無視をして一番端の席にご飯を置いて席についたのはいいんだけど奈美さんやなぜ俺の隣の席にすわる？

「奈美なぜおまえはさぞ当然のようになぜ俺の席の隣に座る？」

「それは当然小説を書いてもらうためですよ！！」

「何小さい胸を張って偉さぞ当然のようにつてるんだ、楓さんのように大きくなってから出直しやがれ！」

そついうと奈美は胸を抑え「この世には貧乳属性という人だって存在するんだもん」とか何とか小さな声で言っていたけど無視して昼ごはんを食べ食堂を後にした。

第三話 酔っぱらい共

その後、奈美は「友達と約束があるので、先輩を説得するのは夜にしときます今日は寝かせませんからね」と、ある一部分を聞かれたら誤解されるような事を言いその一部を聞いたと思える楓さんがお茶を運んでくれようとしたのかそのお茶のコップを派手に落とし、「二人はそんな関係だったんですね～～～！」と、叫んで部屋に閉じこもってしまいその説得に約五時間かけた。

そして今の時刻午後五時俺は布団に寝っころがりながら小説を読んでいたもちろんライトノベルだ。

「か～～～～い～～～～ク～～～～ン、直美お姉さんが帰ってきたよ～～～」

迷惑このうえない音量で直美さんが俺の部屋に侵入してきた、直美さんが少しお酒の匂いがしたため直美さんが何か言っただけだけど無視して直美さんを追い出した。

「誠く～～～ん、開けてよ、お姉さんさびしいよ～～～」

なんか部屋の外で騒いでるみたいだけどそんなのは無視して俺は小説の続きを読み始めた。

「ふ～～ん無視しちゃっていいんだ～～～まだ私が貸した二万円かえしてなかったよね～～～」

そうだったまだ直美さんから借りた二万円返してなかったな・・・

・あの時は何であんなにゲームを衝動買いしてしまったんだろう、それに最近パソコン買い換えたから今二万円返したら今月厳しいので結果まあ部屋のドアを開けなければいけないくて、俺は部屋のドアを開けた。

「ふふふ、よくも追い出してくれたわねまあ許してあげる代わりに今夜は徹底的に飲むぞ〜」

そう言つてどこからともなく直美さんはお酒が大量に入つた酒を取り出した。

「はあ〜どこからそんなにお酒を出したんですか？」

「四次元。ケットからだよ〜」

「なんですかあなたはドラ。モンですか」

「フッフ、よく築いたわねそう私は誠君の未来を替えに未来からきたロボットだったんだよ〜」

「まあ、冗談は置いといて飲むのはいいですけど俺は飲みませんからね」

「つれないな〜飲もうよ未成年とか私には関係ありません」

いや、関係あるでしょと思ひながら酔っているのか抱きついている直美さんから酒の入った缶いわるチューハイを受け取って飲むふりだけをした。

そこに都合悪くなぜか楓さんが現れた、さあ皆さんここで問題で

す目の前にはお酒を飲んでいる女性と男性そして女性の方は肌が結構露出して抱きついているしかも部屋に二人っきりで何か始りそうなムード、さあ答えをどうぞ。

まあ答えはエッチな事関係になるわけで、この状態を見た楓さんは思いつき誤解をして「二人はそんな関係だったんですね〜」と言って部屋を飛び出して行った、なんか軽いデジャブを感じながらも数十分かけ楓さんを説得しなぜか楓さんも一緒に飲むことになった。

~~~~~数分後~~~~~

「だいたい〜何でヒック、誠さんは〜私の気持ちにヒック、きずいてくれないんですか〜」

楓さんも酔っぱらってしまった。

それになんかわけわからないことを言って完璧に酔いが回っていた。

「え〜とそのすいません」

「それにですね〜」と楓さんが俺に説教を始めていると奈美が「先輩！！奈美ただいま帰りました、今日は寝かせませんよ！！」と言って現れたが、酔っているこの二人を見て明らかに面倒な事に巻き込まれると思った奈美は「え〜奈美用事を思いだしたんで帰ります」と言って逃げ出した。

その後、陽さんが「このアニメのDVD買ったから見よう」と口

リアニメで有名なDVDを持て来てこの場面を見て「お酒かゝゝいいね僕も一緒に飲もう」と言って結果三人とも思いつきり酔っ払ってしまい、楓さんには私の気持ちだとか何とか言われ陽さんには「この子は最高だ」とロリアニメのキャラクターの画像を見せて来て、直美さんは何がおかしいのか大爆笑していた。

その後、波木が深夜アニメと一緒に見ようと現れそのまま深夜アニメを見た後俺は眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2380h/>

---

オタクな日常！？

2010年10月21日21時16分発行